

メモの取り方学び理解深く

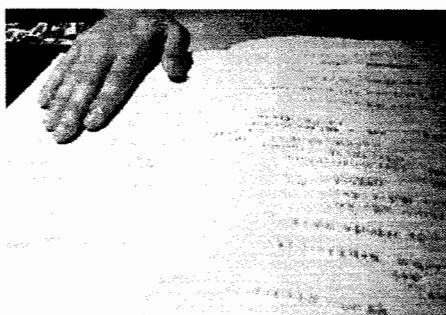
生活は楽ではない。父親が高齢で働いてはいない。母親の仕事だけでは苦しく、授業料などの学費は奨学金で賄う。平日は時間割りを工夫し、週3〜4日はアルバイト。授業が終わると弁当店で深夜まで働き、家族の生活費の一部も負担する。大学にはバイトを生かして自分で作った弁当を持参して節約する。

それでも、大学の勉強が楽しくて仕方がない。入学直後にとった「書き方」の授業が大きか

一段落分けや起承転結をつけることが文章の基本として大事だというのがわかった。

一番役に立っているのはメモの取り方だ。講義を機械的に写すのでなく、重要な言葉同士のつながりを考え、自分の言葉に置き換えてメモする。見返したときすぐ再生できる。そうしたメモの習慣がこの授業でついた。

メモの方法を身につけた後、1年秋にとった財政学のノート



は、2年になった今でも読み返すことがある。始まる前は堅苦しいと思っていたが、講義を聴

大学で学んだメモの取り方を生かして取ったノート。ていねいな字が並ぶ

くと、赤字で財政再生団体になつた北海道夕張市や国の赤字国債の話が出てきて、仕組みの説明もわかりやすい。自分なりに理解しながらメモをまとめ、それまで何げなく使っていた「赤字」という言葉の意味を理解した。その喜びは忘れられない。そして彼は財政学を理解すること、一見関係のないニュースとニュースが繋がっていることを発見した。赤字が膨ら

む。消費税の増税論議が起きる。与党が選挙に負ける。「赤字」というキーワードの下に様々な出来事が水脈のように広がっている。「三権分立」といっても、予算がないと何も実行できないんですよね」。考え方が深まっていく。

テキストを使わずに教授が話すだけの授業でも、ノートを作れるようになった。「自分で考えるようになった。」「自分の言葉で理解する。たどり着く答えはいっぱいある。大学はそういう場」。将来、パソコン関連会社に就職したいと思っている。(山上浩二郎)